げんきカエル

No.51

こども病院ニュースレター

平成 27 年(2015)　10 月 1 日

シアトル研修報告

小児外科医長 大片　祐一

当院と姉妹関係のシアトル小児病院で約１か月間研修させて頂きました。本年度は山口宏医師(専攻医)、松嶋峻介医師(心臓血管外科)、大片(小児外科)の３名で、一軒家を借りての共同生活でした。例年は研修時期が雨季の３月でしたが、本年度は５月中旬からの研修となり研修期間中は晴天に恵まれ快適な生活を送ることが出来ました。

研修内容は３名それぞれが自分の興味のあることを学ぶというスタイルで、病院側も各自の希望に沿って対応してくれました。私の研修の目的は大きく３つであり、１つ目は米国外科医の現状とトレーニングプログラムおよびロボット手術を含めた手術を可能な限り学ぶこと、２つ目はシアトル小児病院が有するクリニカルプログラムについて学び、当院への導入が可能かどうか検討すること、３つ目はシアトル小児病院と他施設との連携について学ぶことでした。研修を通して多くの方々と出会い、学び、米国医療の優れている点、我々の医療の優れている点が明確になりました。とくにシアトル小児病院は医療システム･分業体制･評価機構･経営システムが整っており、病院のビジョンが明確でありましたので我々も見習うべき部分が多分にあると感じました。

今回学んだことを日常診療および日本の小児医療の改善のために役立ていく所存です。このような貴重な機会をくださった長嶋院長、前田貢作委員長･田中亮二郎先生をはじめ国際交流委員会の皆さま、何より忙しい時期に快く私を送り出してくれた同僚の皆さまに深謝いたします。

▲ Prof.Waldhausen と手術室にて

▲ Dr.Avansino と。

▲ 研修メンバー
左から山口医師、松嶋医師、私。

▲ DaVinch 練習中。Dr.Meehan と。

▲ Meltzer 先生（右端）のご自宅にて。ご夫人（左端）、Julie さん（左から２人目）と。

小児外科のメンバー ▶

▲ 院内でクリニクラウンと。

岡崎慎司選手、ありがとう!!

看護部次長 大西　美樹

2015年6月22日(月曜日)こども病院に、岡崎慎司選手が慰問に来られました。岡崎選手は、兵庫県のサッカー強豪校である、滝川第二高校の出身で、2005年卒業後に清水エスパルスに入団されました。2011年にドイツ・ブンデスリーガのVfBシュトゥットガルトへ移籍、2013年FSVマインツ05へ移籍し、現在はイングランドプレミアリーグのレスター・シティFCでプレイをされています。2009年には日本代表のA代表に選ばれ、世界大会で活躍され国際サッカー歴史統計連盟(IFFHS)世界得点王に選ばれています。

慰問の当日、岡崎選手は、入院しているこどもとご家族を励ましたいというご希望があり、各病棟を訪問していただきました。どの病棟でも、一人一人丁寧に丁寧に声をかけて回られ、一緒に写真を撮影したり、たくさんのサインをしていただきました。こども達、ご家族の方は、岡崎選手の姿を見ると皆さん明るい笑顔になり、岡崎選手からパワーをもらいとっても元気づけられました。予

定の時間を大幅に延長したにもかかわらず、最後まで気持ち良く丁寧な訪問をしていただきありがとうございました。最後に、ユニフォームにサインしていただきました。

後日、入院しているこども達から、岡崎選手への感謝の気持ちのメッセージがたくさん集まりました。たくさんのこども達、ご家族の皆さんがたくさんのパワーをもらって頑張っています。ありがとうございました!! 岡崎選手も、イギリスで頑張ってください。微力ながら兵庫県からエールとパワーを送ります。

兵庫県立こども病院の脳神経内科では？

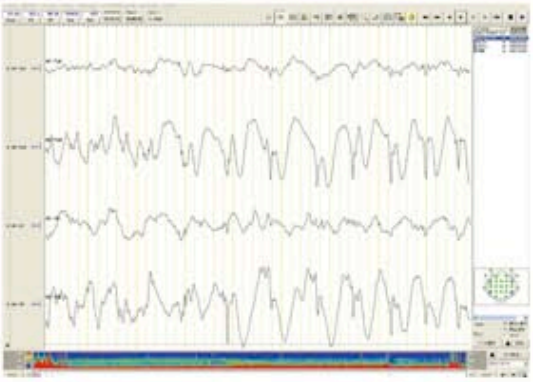
脳神経内科医長 丸山　あずさ

脳神経内科の特徴は、「神経症状」のある子どもたちを対象としていることです。より具体的に言えば、神経症状を来すあらゆる病気が対象になります。子どもの神経症状としては、頭痛、発達の遅れ・退行（できていたことができなくなってくる）、けいれん、意識消失、歩き方がおかしいなど様々なものがあります。

私たちはそのような症状で来られる子どもたちに対して、神経学的診察を行い、原因となる部位がどこか、そこにどのような異常が起こっているのかといったことを調べ、治療、ガイダンスを行っていきます。

小児神経を専門とする施設のなかでも、当科で特に力を入れているのは、熱性けいれんや急性脳症などの神経救急疾患です。これらの病態は重症化すると重い後遺症を残してしまいます。呼吸や循環の厳密な管理を担当する救急集中治療科と連携し、「こども医療の最後の砦」としての誇りと責任感を持って診療にあたっています。小児集中治療室においては意識障害やけいれん重積の子どもたちの脳波をリアルタイムでモニタリングできる体制を24時間365日準備し治療に役立てています。この体制がとれるのは兵庫県下では当院だけであり、全国的にみてもその実施件数はトップです。このような神経救急医療体制をこの10年間で築き、後遺症なく退院できる子どもたちの数を飛躍的に高めてきました。現在はポートアイランドの新病院での診療の準備を行っていますが、さらに質の高い医療を子どもたちに提供できるように、日々努力しています。

当院 PICU での連続脳波モニタリングの実際の様子



意識障害の患者さんの脳波
（見た目にけいれんがない、脳波のみの発作 "非けいれん性発作"）

こども病院、古き良き時代

心臓血管外科部長 大嶋　義博

私が研修医として勤務していた昭和59年から周産期センターの着工が始まる平成４年までの、古きこども病院について、朧な記憶を辿ってみたいと思います。手術室が旧館２階にあり、学童、幼児、乳児、新生児の年齢別病棟に分かれ、ICUが3A病棟と呼ばれていた時代です。仕事は忙しい反面、職員のレクリエーションは、今より充実していました。

周産期センターの西側、医局の南側には、クレーのテニスコートがあり、毎週末になると、看護師、医師、放射線技師、薬剤師、臨床検査技師、総務、医事課など多くの職員がテニスを楽しんでいました。テニス部の活動は本格的で、学生時代からの経験者が中心となり、県内や関西地区の病院対抗戦にも出場していました。また、周産期センターの東側、立体駐車場のある場所には、芝生と花壇のある裏庭があり、毎年、バーベキュー大会が行われていました。肉や野菜を頬張り、ビールを飲んで、いい気分になったことがありました。しかし、周産期センターが完成した後は、産科の患者さんに遠慮したためか、院内でのバーベキュー大会は自然消滅しました。また、母とこどもの指導教室では、さつき会総会や新年会などが行われていました。近年は、院内での飲酒の機会が全くなくなり、少し寂しい思いもします。年中行事として、毎年、ラジオ関西ホールで行われていた、クリスマスパーティも思い出深く、詰め所毎に新人看護師や医師が歌や踊り、寸劇などを披露していました。観客の盛り上がりも凄まじく、普段の過酷な勤務の反動か、院内旅行やクリスマスパーティでの、職種を越えた、一体感、盛り上がりは、今にない、懐かしい思い出です。

県立こども病院全景

Concept コンセプト

●基本理念 周産期・小児医療の総合施設として、母とこどもの高度専門医療を通じて、親と地域社会と一体になってこどもたちの健やかな成長を目指します。

●基本方針

1. 患者の権利を尊重した医療の実践
2. 安全・安心と信頼の医療の遂行
3. 高度に専門化されたチーム医療の推進
4. 地域の医療・保健・福祉・教育機関との連携
5. 親とこどもが一体となった治療の推進
6. こどもへの愛とまことに満ちた医療人の育成
7. 医療ボランティアとの協調による患者サービスの向上
8. 継続的な高度専門医療提供のための経営の効率化

編集後記

今年の夏も記録的な猛暑でした。まだまだ残暑が厳しい毎日ですが、今号がお手元に届く頃には、秋の気配が感じられるようになっているでしょうか？

さて、「げんきカエル」では今月号からこども病院の思い出話をリレーで執筆いたします。どのような思い出話が掲載されるか、ぜひご期待ください。皆様のご意見をお待ちしております。

編集委員長：橋本ひとみ
編集委員：大津雅秀　大西美樹
濱田米紀　山本正子
沼田憲作　坂本有里恵
隅岡繁宏　福本宏文

本誌に関するご感想・ご希望・ご質問はこちらまで

兵庫県立こども病院
周産期医療センター　小児救急医療センター
小児がん医療センター　小児心臓センター
〒654-0081　神戸市須磨区高倉台１丁目１-１
TEL 078-732-6961
FAX 078-735-0910（総務課）
FAX 078-732-6980（予約センター）
URL:http://www.hyogo-kodomo-hosp.com/
E-mail: info_kch@hp.pref.hyogo.jp

27病P2-013A4